

## 中世における真言律宗の造像活動について

\*  
黒 木 隆 英

中世において運慶・快慶を始めとした慶派、院派、円派などの仏師集団があり、善派も、鎌倉時代中期に善円を始めとして活躍した仏師集団である。特に奈良・西大寺を復興した観尊によって開かれた真言律宗に関係する寺院の造像が中心であった。本論では、いま一度、善派といわれる仏師たちについて現在までわかっている範囲で作例をあげながら述べてみたいと思う。そして、筆者の自坊である京都府宇治市にある橋寺放生院の本尊である地藏菩薩立像について残されている資料は少ないが、善派による作例の可能性があるのかどうかを検討してみたいと思う。

第一章では、仏師善円の作例について述べている。善円の名が記されている作品を時代順にいうと奈良国立博物館・十一面観音立像、東大寺・釈迦如来立像、ロックフェラー財団蔵(アメリカ)・地藏菩薩立像、西大寺愛染堂・愛染明王坐像の四つの作例と、最近になって新出作例として薬師寺・地藏菩薩立像とをあげて像内の銘文などから検討している。まず、十一面観音立像であるが、承久三年(一一二二)に観尊が願主になって作られたことが、胎内の墨書銘からわかる。像高四十六・六cmで檜材の寄木造で玉眼嵌入の仏像である。この十一面

観音立像は、胎内の墨書銘には承久三年の年紀の銘文以外にも権僧正範円をはじめとして僧名、弁円、善円の名も見ることができ。この経巻の裏側には、多数の十一面観音立像の摺仏が押されており、それぞれの摺仏の下に結縁者の名前が一人ずつ記されている。墨書銘の中に見られる権僧正範円という僧は、法隆寺金堂阿弥陀如来像の造像記の中に名が出てくる。東大寺指図堂の釈迦如来坐像は、像高二十九・一と小像ではあるが、おだやかな形で整えられており、面貌は厳しさの中にも端正な部分が見て取れる。衣文線は、はっきりと強弱のある形で彫られており宋様式を感じるところもあるが、運慶などの慶派に見られる実感が強すぎることはない。厳しさの中に前時代の優美さを見て取れる像である。

また、貞慶・明恵といった当時の著名な高僧・由緒のある寺院と関係が持てることから見ると仏師としての名はかなり知られていたのではないかと思われる。次に、旧堀口蘇山氏蔵の地藏菩薩立像であるが、極彩色で玉眼嵌入の像である。この像にも胎内に多数の墨書銘が書かれている。現在でも極彩色が残っている。まず、範円の名が出てくるが前権僧正範円として出ており、この像では、実尊が権僧正と記

されている。てこの権僧正の銘によって製作年代を考えることができる。というのも『興福寺別当次第』や『興福寺寺務次第』によると範円は貞応二年（一一二二）に前権僧正になっており、これ以後に像立されたのは確かであろう。

墨書銘の共通の銘は、範円以外には延円・実算・円尊など半数以上出てきている。このことから、両者の間には何らかの関係があると思われるが伝来などの詳しいことはわからない。西大寺愛染堂の愛染明王坐像は、観尊を大願主として造像されたものである。この像の像内からも納入物が見つかっている。観尊が大願主となり範恩が大壇越となつて宝治元年（一一四七）に仏師善円が造像したことがわかる。小像であるがふっくりした肉身、ゆつたりとした衣文表現が特徴である。明王像ではあるが、表情は誇張されておらず憤怒相の中に穏やかさが見て取れる。薬師寺・地藏菩薩立像は、像高九十七・三cm、檜材で造像されており、玉眼が嵌入されており彩色がなされている。この像にも墨書銘が書かれている。頭部は耳後で前後に矧ぎ、内ぐりしている。本像は右手に錫上を執っており、左手に宝珠を乗せている。地藏菩薩の通形である。筆者は善円の円熟した作風を知ることができる。と考える。

第二章では、仏師善慶・善春の作例について述べており、仏師善慶の銘が確認できる作例として、西大寺本堂藏釈迦如来立像・兵庫県生服地藏薬師如来坐像・般若寺文殊獅子坐像の三件である。他にも時期は明らかではないが、観尊の意を受けて補修したという西興寺・地藏

菩薩立像、善春作といわれる般若寺・文殊獅子像・元興寺極楽坊・聖徳太子十六歳像・西大寺愛染堂・興正菩薩像の検討を行っている。西大寺釈迦如来立像については、具体的に仏師善慶の名が、釈迦如来立像の像内に見られる銘文の中に見られる。釈迦如来立像の造像には善慶だけではなく増金・行西・盛舜・弁實・迎攝・慶俊・尊慶の九人の仏師たちによって造像されたことが見てとれる。像は檜材、檀像風、彩色はほとんどなく素木・截金円紋を施している像である。次に兵庫県・淡路島にある正福寺の薬師如来坐像であるがこの像の裏面にも次のような墨書銘を確認することができる。面貌は、少し面長であるが端正な顔つきをしている。

先に述べた西大寺釈迦如来立像に近いものがある。衣文の表現についても、複雑そうに見えるがうまく処理している。般若寺の丈六文殊菩薩像も善慶の造像である。最後に、西興寺・地藏菩薩立像については、奈良国立文化財研究所に調査をされている。それによると時期が明らかではないがこの地藏菩薩立像にも墨書銘がある。筆者は、善慶は戒律を持しており、作善という点からも、新たに作ったと考える。まず、般若寺・文殊菩薩像の獅子像であるが、文殊菩薩像自体は、善慶によって作像されたことは、先に述べた通りである。善慶造像の文殊菩薩像の獅子像を引き続き造像していることから後継者であろうことは容易に推察できる。善春が獅子像を木心塑像として仕上げている。次に、元興寺極楽坊の聖徳太子像は、木造彩色像でしる。多数の納入品が納められており、この像は、遠くを見据えた透明感のある目

が特徴的である。納入文書には多くの庶民の名が見え、当時の庶民の聖徳太子に対する信仰を窺うことができる。興正菩薩観像は、善春の作例の中で最も知られているものである。善春が造像したことを確かめることができる。この像は、鎌倉時代にとける肖像彫刻の傑作である。

第三章では善派周辺の仏師たちとして快成・増金・通慶たちの作例について検討している。仏師快成の銘が確認できる作例としては、現在のところ、知られているのは中山寺・十一面観音立像・奈良国立博物館・愛染明王坐像・春覚寺藏地藏菩薩立像・福岡県万行寺藏阿弥陀如来立像の四件でしる。増金・観慶については、浄瑠璃寺・馬頭観音立像の造像にたずさわっている。快成・増金・観慶は善派グループの仏師であったと言えよう。誰の作かはわからないが、奈良・良福寺の獅子文殊菩薩坐像もうねりの多い目の表現ふっくらと丸い面貌表現が善派と共通すると考えられる。

第四章の真言律宗と橋寺放生院・三室戸寺についてであるが、古代から中世の橋寺放生院について、現在多くを知ることにはできないが、創建当初は常光院または地藏院と呼ばれていたようである。地藏菩薩の霊地として僧道登が初めて宇治橋を架橋した時に、宇治橋の往來の安全を祈願して堂舎が建立されたとされている。宇治橋の架橋に関する「宇治橋断碑」が残されている。木津・泉教寺と同じように宇治橋を管理するために建立されたと思われる。鎌倉時代以降の橋寺放生院は、観尊によって再興された。平等院の僧侶たちの要請を受けて宇治

を訪れていて、橋寺の堂供養を行っており、三室戸寺と平等院丈六堂で受戒を行い、放生会を行っている。三室戸寺での受戒には特別な思いがあったと筆者は考える。その後、観尊は橋を架橋して宇治橋の落慶法要をとり行っている。また放生会を行っており、それから、寺号が橋寺放生院と呼ばれるようになったと考えられる。そして、十三重石塔を建立して納入品の五輪塔に当時としては高価で神聖なものとしていた水晶を使用していることから観尊の厚い釈迦に対する信仰を見ることが出来る。その後に、橋寺の住職が西大寺の長老に就任しており、観尊没後も、真言律宗との関係が深く、宗内でもかなり重要視されていたと考える。後に橋寺は火をつけられるが、本尊は無事であり信者の信仰心の強さを感じることが出来る。最後に橋寺放生院・地藏菩薩立像の形態と伝来について簡単に述べている。

結論については、善派の仏師たちは、必ず受戒を受けており戒律を護持することが前提になっていたと考える。善派の仏師たちは、観尊を尊敬し崇拝していたのであろう。従って真言律宗・特に西大寺専属の仏師というよりは、観尊のお抱え仏師というべきだと考える。そして、善派の様式は、まず顔の輪郭が球形を思わせるような丸い顔、肉質の厚いふっくらと張った頬の表現、起伏の激しい眉を含めた目の表現、小さな唇、これらの特徴を総じて言うとき、温和、穏やかであると考えられる。こうして見て見ると、善派の仏像には面貌に特徴があるように思えるのである。彩色については、あくまでも推論の域を出ないが淡い感じであったと考える。橋寺放生院・地藏菩薩立像は、顔

は少し面長であり、長く起伏の激しい切れ目、ふっくらと張った頬、小さな口であり面貌は善派の特徴をよく捉えていると考える。観尊は、殺生禁断の発願を成就して宇治橋架橋を行い、橋寺を再興して十三重石塔の建立が八十一歳と高齢であった。これまでの活動の集大成として一連の事業を引き受けたのではないだろうか。そうであれば、橋寺放生院の地藏菩薩立像の造像に力を注いだ可能性は高いと思われる。筆者は、総合的に見て橋寺放生院・地藏菩薩立像は観尊によって、善派の仏師によって造像されたと思うのである。